

## 【 「選ぶ」 = 「選ばない」 】

これまで数回の代表候補合宿を行い6月に開催されます第3回デフサッカーワールドカップの選手20名を先日発表しました。今回の代表発表では、前回の台湾で開催されたアジア大会のメンバーから新しく3名を追加選出しました。「中島正」は3年ぶりの代表復帰で「岡田侑」と「岡田拓」は兄弟で初選出です。主将は「細見」、副将は「松元」「桐生」「古島」の3名と前回と同じ体制で臨みます。代表監督に就任してからはイラン大会、台湾大会に続いて今回のイタリア大会で3回目の代表発表となります。選考の回数を重ねる毎に代表選手を「選ぶ」ということは、「選ばれない選手を選ぶ」ということに大きく責任を感じています。それは選ばれない選手の方が圧倒的に多いからです。選考会に来ている選手全員の頑張っている姿や話している時の瞬間、応援に来られた家族の姿や、合宿や大会準備を夜遅くまで対応し準備してくださっている鈴木会長をはじめ協会スタッフの姿も浮かんでいきます。そんな気持ちを抱えながら、毎回悩みに悩んで決断を下しています。選ばれなかった選手だけではなく、スタッフの思いを背負い、覚悟と目標を持ち大会まで毎日時間を惜しんで準備し挑んでほしいと思っております。毎日どれだけ他人以上に積み重ねられるかによって大会中にどれほど力を発揮できるかに関わってきます。

デフサッカーワールドカップ(Deaf World Cup)は、ワールドカップと同様にろう者 (deaf) サッカーの世界大会で4年に1回開催され、各大陸の予選を突破した国々が出場します。第1回は2008年にギリシャのパトラス、第2回は2012年にトルコのアンカラで開催され、今回の第3回はイタリアのサレルノで開催されます。そして、組合せも決まり16チームが4つのブロックに分かれて予選を行い上位2チームが準々決勝に進みます。私たち日本は、予選B組に振り分けられ、ロシア(7位/4位/優勝)、ギリシャ(5位/11位/8位)、アメリカ(4位/12位/出場なし)と同組となりました。この3カ国は今までの世界大会で1度も勝ったことがない格上のチームばかりです。

※日本(出場なし/8位/14位)

※直近の世界大会結果(第1回/第2回/デフリンピック2013)

大会詳細はこちらを <http://www.2016deafworldcup.com/en/> ご覧ください。

デフリンピックへ出場できる条件も年々厳しくなっており、アジア大会等の国際大会で結果出すことだけでなく、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会が示す基準（世界大会でメダルの可能性のある競技）もクリアする必要があります。代表強化事業を考えますと世界大会で活躍する年代から逆算して育てていく道筋と、そこに関わる指導者の養成を整備しユース育成との2つの柱を10年後、20年数年後を見据えてのビジョンを構築していく必要があります。世界のろう者サッカーと日本を比べると、海外ではすでにユース年代の育成と指導者の養成の双方を強化しており、遅れているのが現状です。私は、日本ろう者サッカー協会の育成部長も担当しておりますので、未来を見据えつつ、ユース育成と指導者養成と共に力を注がなければならないと考えています。

その為に必要な指導者ライセンスや講習会開催の為にまず3月初旬に灘高校で開催された「神戸市サッカー協会指導者講習会初級コース」を受講させて頂きました。この講座の受講理由は兵庫県神戸市には各種カテゴリーにそれぞれ良い指導者が多く、良いチームと選手が多く育っており、JFAよりも昔から指導者講習会を開催し指導者の育成に力を注いでいるという確かな歴史があります。多数のインストラクターが分担しながら、コースを担当されており講義も実技も受講生の意見を引き出しながら行われていました。今までご自身のサッカー経験がないにも関わらず、子どもがサッカーを始めたことがきっかけでコーチになられたご父兄の方々も自分から何がわからなかったのかというようなそれぞれの悩みなど積極的に発言することで整理でき、それを解決するにはどうすればいいかをグループで考えながら意見交換もでき楽しく1日をおすごすことができました。昼食の時間も惜しむことなく、参加者が1人にならないように工夫されており、雰囲気の良い場面を作られていることにより多くの発言が出て、非常に参考になりました。

3月末にはJFAとFA（The Football Association）主催による障がい者サッカー指導者講習会が巣鴨スポーツセンターで行われイングランドサッカー協会が実施している様々な障がい者サッカーに対する指導スキルを受講させて頂きました。ろう者、知的、脳性まひ、ブラインド、精神、電動車椅子、アンプティー、キッズと全国からの指導者が集まりディスカッションし、それぞれの視点から良さを出し合って混ざり合ったサッカーをするにあたり、障がい者だけではなく、子どもから年配の方まで年齢がばらばらでもよりよく楽しめる空間作りは、グラスツールやイングランドが考えるカリキュラムをうまく取り入れることで本当に面白いものが出来ていくのではないかと期待を持たせてくれました。特に他の障がい者サッカーを実際に体験したり、指導する機会があまりなかったので勉強になりましたし、イングランドのろう者のサッカー指導に関する情報も得られましたので世界大会に向けて参考になったことは間違いありません。

講習会の最中、参加者の方々から聴覚障害/ろう者サッカーについても多く質問を受けました。

「実際に聞こえないということがどんなことなのか？」

私たちは、生活や仕事に関する情報の多くを、目と耳で得ています。文字を目で追っているつもりでも、私たちは無意識に頭で音読しています。自然体で聞いているので、聞こえないということが私たちにはわかりませんし、わかりにくいのです。聴覚障がいとは、医学的には、外部の音声情報を大脳に送るための部位（外耳、中耳、内耳、聴神経）のいずれかに障害があるために、聞こえにくい、あるいは聞こえなくなっている状態のことをいいます。聴覚障がいは外見上ではわかりにくい障害であり、その人が抱えている困難も、他の人からは気づかれにくい側面があります。聴覚障がい者のコミュニケーション方法は、聴覚障がいの種類や程度のみならず、聴覚障がいになった時期や、教育歴などによって、一人ひとり異なります。そうした背景が本人のアイデンティティとも深く結びついています。聴覚障がい者のコミュニケーション方法には、手話、筆談、口話、聴覚活用などさまざまな方法がありますが、どれか一つがあれば十分ということはなく、多くの聴覚障がい者は話す相手や場面によって複数の手段を組み合わせたり使い分けたりしています。手話は、聴覚障がい者がすべて手話を用いるわけではなく、日常的に手話を用いている人から、まったく手話がわからない人、手話を理解できるなど、さまざまです。口話は、話し手の口元や頬の動き、表情などを視覚的に捉え、さらに文脈なども総合的に判断しながら、話の内容を推測、理解しつつ、表現には音声言語を用いる方法のことをいいます。聴覚障がい者にとっての聴覚口話とは、断片的な情報から話の内容を推測するということにより、常に緊張を伴う方法です。最後に日本ろう者サッカー協会のエンブレムですが、漢字の「聾」を分解すると、「龍」「耳」になることから、日本ではタツノオトシゴが聴覚障害者の象徴として使われており、全日本ろうあ連盟をはじめ、一部の聴覚障害者団体のシンボルマークに用いられています。

